

雑誌「幼児の教育」にみる「お遊戯会」論

—大正10年から昭和5年—

○田中芙美子

戸田雅美

(東京家政大学大学院)

(東京家政大学)

1. はじめに

かつて、保育の場において「お遊戯会」と呼ばれていた行事は、現在「生活発表会」と呼ばれることが多く、また「運動会」や「展覧会」などと並んで一年間の保育の中でもっとも大きな行事の一つとなっている。さらに、子ども達の発表を保護者達が楽しみにしている行事の一つでもあるだろう。「お遊戯会」がその行事の方法・目的をめぐって、現在のような形になるまでに、保育者たちによってどのように考えられ、どのように実践されてきたのかを日本幼稚園協会によって発行された雑誌「幼児の教育」から探っていこうと思う。今回の発表では雑誌「幼児の教育」の中で、最も「お遊戯会」に関する記述の多いと思われる、大正10年から昭和5年までの議論を中心とする。

2. 大正10年までの「お遊戯会」

こちらの資料で確認できる範囲内では、保育行事として「お遊戯会」が成立するのは「運動会」などと比べて遅かったようである。いくつかの幼稚園の記念誌などを調べてみても「お遊戯会」「学芸会」等の記述が確認できるのは大正後期に入ってからか、昭和初期であるものが多い。しかし、雑誌「幼児の教育」を調べていくと、大正時代の初期に年中行事（桃の節句や端午の節句など）の中で保護者を招いて子ども達が遊戯を披露しているという記述が発見できる。この時期にこれらの行事が保育行事の中で「お遊戯会」として確立していたかは定かではないが、保護者に子どもの成長を見せ、またその成長と一緒に祝うという事は行われていたようだ。これが大正後期になると、いくつかの幼稚園の記念誌や雑誌「幼児の教育」の中にも「お遊戯会」「学芸会」等の記述が見られるようになる。

3. 「幼児の教育」における「お遊戯会」の記述

先ほども述べたように、雑誌「幼児の教育」は明治42年から発行されているが、「お遊戯会」について理論的な記述は少ない。その中でも多く記述されているのは大正10年から昭和5年にかけてである。この時期に「お遊戯会」について論じているのは倉

橋惣三によって4回と、長尾豊によって9回だけである。さらに、東京女子師範学校附属幼稚園においての実践が3例掲載されている。

4. 「お遊戯会」に対する理論

(1) 倉橋惣三の理論

倉橋惣三がこの時期の雑誌「幼児の教育」の理論的な基盤となっているのは周知の事実である。この倉橋が、大正後期から盛んになった、「お遊戯会」についてどのような意見を持っていたのかについて述べていきたい。倉橋は大正10年の雑誌「幼児の教育」(21巻2号)『森の幼稚園』の中でニューヨークの幼稚園を訪れた時の感想を述べている。ここで、倉橋は幼稚園の子ども達が行う遊戯に対し感心している。この時行われた遊戯とは、小学校の子ども達と、幼稚園の子ども達が互いに遊戯や劇を見せ合うというものだった。その劇の内容は「羊飼ひの簡単メロドラマ」であり、大勢の子ども達がぞろぞろと腹ばいになって出てきて、羊の声のまねをしたり、羊飼いが枯れ枝を持って羊の間を歩いたり、羊を追ったりするものであった。これを見て倉橋は、「私は我国の幼稚園で時々見る、幼児演芸会には、少しも興味を持って居ないものです。」と述べ、さらに日本で行われている「幼児演芸会」は「子供の自然以上のもの」になっていると批判している。さらに、この時見た遊戯や劇については、「団欒の心持ち以上に少しもわざとらしさもない」と述べている。

また、大正12年の雑誌「幼児の教育」(23巻9号)では、『情操教育と芸術教育』と題して、当時盛んに行われていた芸術教育に対し批判している。これは芸術教育そのものを批判するものではなく、流行のようにとらえられ、行われていた芸術教育についての批判であった。

さらに、大正14年の「幼児の教育」(25巻6号)では、『幼児の舞踊について—近來の傾向を痛心す—』と題して、児童劇の流行を例にあげ、舞踊についても、幼児の舞踊は幼児自身のためのものであるとして、「見物人のための芸ではない」と批判し、幼児舞踊会や幼児演芸会などはあってはならないものであると述べている。

ついで、昭和5年の雑誌「幼児の教育」(30巻2号)『ストーブを囲んで』の中には「遊戯についての話」として「遊戯」を主題にした座談会の内容が掲載されている。ここで、倉橋は子ども達が大人に遊戯を見せて喜ぶことを認めているが、だからといって見せるために遊戯を行うということは別のことでありと主張している。

(2) 長尾豊の理論

長尾豊は「芸術教育会」(成城小学校創設者の沢柳政太郎会長)のメンバーで、雑誌「芸術教育」の発行や講習会などの開催をし、芸術教育の振興をはかっていた人物である。また、長尾はお話や劇の脚本集をいくつも出版しており、雑誌「幼児の教育」にも何度となくその脚本集の広告が掲載されている。

長尾は幼児の劇についての彼の持論を昭和3年から1年以上に渡って雑誌「幼児の教育」(28巻2号から29巻6号)に載せている。長尾の理論はただ単に、「劇」に対する机上の理論だけでなく、実践家として保育者が劇を行うときに参考にされていたものであると考えられる。

長尾は当時行われていた幼児の劇について「何をしているのか分らない」ものと「大人主導」のものがあるとしている。また、「大人主導」で行われているものは、幼児の劇を「見世物」として考え「劇らしく」するために職業演劇のまねをしていると指摘している。また、観客側の「見世物根性」という意識も影響していると述べ、主催者側が観客達に対して幼児が劇を行うことの意図を説明する必要があるとしている。そして、長尾は当時行われていた幼児の劇に対し、幼児の生活の中の劇的分子を無視している、また「児童劇」の本意を忘れてしまっているとも批判している。そして、あくまでも「劇は遊戯であり、幼児の劇演出はあそび」であると主張した。

そして、「劇」を実際に行う前には「お話」が重要であるとして、「お話」を聞くことから「お話ごっこ」や「お話遊び」が始まること、そこから子ども同士が演技者になったり観客になったりして遊ぶものであるとした。そのため保育者は劇に対する理解の前に、「お話」の理解、また、幼児の遊戯や唱歌、童謡などを総合的にとらえ保育の中で取り扱っていくことが大事であると主張した。

4. 考察

以上のことから、大正10年から昭和5年までの雑誌「幼児の教育」に限ってみてみると、9年間という年数のわりに「お遊戯会」に対する意見が少ないことがわかり、またこの時期には倉橋惣三と長尾豊の2人の意見が中心であったことがわかる。

また、2人の意見から、大正後期から昭和初期にかけて、一般的に「お遊戯会」といわれる行事が行われ、その中で「見せる」ということに傾倒したお遊戯や劇が行われていたことがわかる。そのことに倉橋は警告を出していた。倉橋の考える「お遊戯会」とは「見せる」というものではなく、あくまでも幼児中心であり、すでに述べたように遊びの中で自然と幼児同士が見せあうようなものであったことがわかる。

そして、長尾も同様に当時の「お遊戯会」などの中で行われる「見せる」ための劇に対し批判し、幼児を中心とした劇のあり方について盛んに発表していたことがわかる。長尾は「劇」について、幼児の生活を中心に幼児の好むお話から自然と「お話ごっこ」や「お話遊び」に発展していくことが好ましいと述べている。また、長尾は脚本集を多く発表していたことから、当時の保育者達の参考になっていたものと考えられるだろう。

今後は、雑誌「幼児の教育」において倉橋惣三や長尾豊などの意見を知った保育者達が、どのような実践を行っていたかについて調べていく必要があるだろう。また、現代の保育における「劇遊び」との比較もしていきたいと考えている。

参考文献

- ①「東洋英和幼稚園創立八十年の歩み」編集委員会「東洋英和幼稚園創立八十年の歩み」1994年
- ②高崎市立高崎幼稚園百年史編纂委員会「高崎幼稚園百年史」1986年
- ③松本市立松本幼稚園百年誌刊行会「松本市立松本幼稚園百年誌」1997年
- ④小原国芳著「学校劇論」玉川大学出版部1980年